

1日おいて日曜。朝からイベントの仕事があった新を迎えに行った吾華音、夕方アルテミエフ家に戻ると、アリーシャのブルゾンが来客用のハンガーに。自室から静かな口調でロシア語を交わす2人の声が聞こえる。

「ただいま」「お邪魔します」

姉妹が部屋のドアを開け声を揃えると、アンジェリカ・アリーシャの2人の「おかえり」「いらっしやい」の声。2人はデジタル会議用テーブルの上でブランドの装備品の仕様検討をしていたようだ。

こういった数値の絡む仕事の話の時は、アリーシャは驚くほど真面目な顔を見せるし、口調も極めて丁寧。普段見せないバックボーンが透ける。今のアリーシャはアスリートやアイドルでなく、優秀な博士(ドクター)だ。

「アカネ、この靴だけど、〇〇社が先週の展示会でサンプル出してきた新素材使うと見た目とホールド変えないで負荷減らせるよ。重さもほんの少し。でも値段がだいぶ上がる。ワンオフモデルだし少しでもいいもので渡した方がいいと思うけど、一応先方に確認取って」

テーブルに映し出されたデータをタップすると、ホログラフで実際の靴の形状、何処にどんなふうに素材が使われるかが表示される。運動シミュレーションのリアルタイムレンダリングも。

いつもと違う口調で話すアリーシャに新は驚いた顔。アンジェリカも変更には賛同のようで、感心した様子でデータを見ている。

「マテリアルサンプルは明日無料で届くけど、試作挟むから納品用はもちろん購入しないといけない。メーカーのサンプル動画見た感じ、だいたい想像通りの改善あると思ってるんだけど、これ先行でもう最初からこっちの案で行っちゃ駄目かな、後発品のために差額は今回は研究費広報費ってことでうち持ちで」

「OK。引っ張り合いになってないようなら、少し多めで発注して。その素材、応用範囲の検証してみよう。あと、納品の価格は上がってもあの先生は飲む筈だからそれは心配ないから、正しい見積もりでお願い。これ履く子、まだこの高さのヒールでステップ踏むの慣れてないって、先生の方から相談あったから」

「応用やっていいの？ならワタシもお金出すから一番広い寸法のでオーダー入れて。多分だけどメッセンジャーバッグのこことかここにも使える、格段に長持ちするようになるよ。これはワタシのオーダーでお願いしていいかなアン姉さん」

「やってみる。土台のデータはアーヤがやるでしょ？」

「形状サンプリング処理あるから、そこは任せて」

もう何年もこの仕事をやっているかのように、ときぱきと話を進める3人。新は蚊帳の外になってしまい、少しおろおろしながらカバンからiPad miniを取り出した。そこに不意にアンジェリカの声がかかる。

「新ちゃんごめんね、立て込んで。本題は夕飯の後になりそうだから、お腹埋まらない程度にそこの冷蔵庫の中のもの飲んだりしてて…あ、そうだ！吾華音、アーヤ、これって新ちゃんの稽古靴に使えない？一番ハードな使い方しそうな子のデータ取れると思うけど」

「えっ！わざわざそんな！お気になさらなくても！」

慌てて返事をする新、アリーシャは難しい顔のまま小声のロシア語で何か呟いた後、いつもの口調で新に。

「ねえアラタ、今のトレーニングシューズ、どれくらいでソール減り始めてる？」

「アリサちゃんと稽古するようになって早くなったかな…目に見えて削れてくるまで3週間くらい」

「レース…靴紐の調整はどれくらいしてる？」

「稽古前には毎回締めてるけど、最近稽古の後緩んでる事が多いかも」

アリーシャは満足げに頷いて続けた。

「アラタ、稽古靴作っちゃおう！満足するものができるまでいくつか作るカモだけど、紐なしで今よりしっかりしたのできそうだから」

「えっ、いいの？お仕事に無理に私混ぜてくれなくても…」

「遠慮しなくていいよ、新。素材のデータ取りのついでだから。そう
だ、折角だからみんなの作ろう。アン姉のを普段履きで作れば4人で
いたい基本形出せると思うし。アーヤ、素案お願いしていい？」

「もちろん♪靴以外のアイテムもついでにやっちゃおうかな。アン姉
さん、フィニッシュする図案増えそうだけどいい？」

「いいよ。新ちゃん、何か欲しいものがあつたら今のうちに言っちゃ
え！」

「え、ええー。そんな、申し訳ないです…」

テンションが上がった2人にすっかり恐縮する新。と、そこで吾華音が
大事な事を思い出した。

「あ、ごめん。夕飯の後ちゃんと話すけど、今作ってる靴の後、2人と
も先1ヶ月別件お願いしたいんだ。新もね」

勘のいいアンジェリカが即答する。

「フェイクオーダーがフェイクでなくなった？」

「ご明察」

「え？その話でアタシとアン姉さんとアラタってことは？」

頷いた吾華音、神妙な面持ちで。

「特にアン姉とアーヤには難しい案件かもしれないけど…3人にオフ
ーを出したいの。私のファーストライブのゲスト」

少し時間の流れが止まる。ややあって、口を開いたのはアンジェリカ。

「そうか…。ひとつ確認させて。それ、吾華音の意思だよね？やらされてるんじゃないよね？」

「オファーはティアラ代表からだけど、4人でやりたいのは私だし、オファーはもう快諾の返事しちゃった」

少し厳しい顔から転じて笑顔でアンジェリカが答えた。

「わかった。久々本気出すよ。ボイトレ一緒にやろう。私と歌うなら相応でないと困るよ？座長さん？」

「う…怖いなあ…でもお願いします、初めてだよね、アン姉と一緒にレッスン。勉強させてもらいます」

「改まらなくていいよ。吾華音が歌う気になったなら、私も嬉しい」

「アタシもレッスン必要？」

「アーヤは新と組んで、主にパフォーマンスをお願い。歌ってももらうけど、歌については新の引き立てで」

「イイよ、分はわきまえてるからー。ただ、パフォーマンスは暴れさせてもらうよ？ちゃんとスポンサーに確認取るよ？そっちではアラタに引き立てってもらう」

「それは大歓迎。受けてもらえる？」

「もっちゃん！混ぜてもらえなきゃ拗ねるよ！」

笑顔で言うアリーシャ。2人の快諾の様子に安心する吾華音だが、新の様子がおかしい。

「お姉ちゃん…私、まだ早くないかな…正直に言うね、怖い。出たくない」

再会した頃以来、久々に新が不安げな表情を見せた。予想外という顔をする従姉妹2人だが、吾華音は想定内という顔。

「…そっか。こればかりは新に決めてもらう他ないから、仕方ないかな」

「そんな！アラタ！一緒に出よう！絶対楽しいよ！」

「私、アリサちゃんみたくスターじゃないから…」

「新ちゃん、すぐ決めなくていいよ、怯える気持ちはわかる。吾華音が姉さんだって周りに知れてからいろんな事があっただろうし。でも…」

「アン姉の素性も新はわかってるから」

「吾華音…」

「…アンジェリカさんもほんとは雲の上の人だって、知ってます。折角自分の立ち位置が見えてきたのに、皆さんとステージって考えたら、急に惨めな自分が嫌になっちゃって…」

「まって、アラタ。それは聞き捨てならない」

不意に、アリーシャが眉を顰めて言った。

「アタシがアラタと稽古したいって言った理由、伝わってなかったかな。アタシね、手の届くものに一生懸命になるほど退屈な生き方してないの。その生き方のどん詰まりが今のところのアリサ・タルコフスキーなの。そのアタシの今の壁が、アラタだよ」

「でもそれは武道の話で…」

「違う！アタシ言ったよね、今日からライバルだからって。本気で行くからって。アタシあの時、ドリアカのアイドルの1人として言ったんだよ。ステージの上の眩しいアラタに勝つために、アタシはドリアカにいるの。稽古は少しでもアラタを知っておきたいからしてることだよ。だって、武道も神事も芸能も、全部繋がってるって。アラタはパフォーマンスで教えてくれた。アタシだって…きっと…そうだから…」

強い口調から弱いトーンに落としつつ言った後、ちらと吾華音に意地悪な目線を投げて。

「アタシが興味あるのはあくまで表舞台だから。アイドルって枠なら、

ここではアラタが一番先輩。アカネやアラタがどう思っても、アタシにはそうだよ」

「アーヤその言葉覚えてろよー、初舞台で後悔させてやる。…新、このステージでの役回り、今のアーヤの言葉でわかってくれたかな」

苦笑いの後、諭すように吾華音が。新がますます目線を下げて切り返す。

「…そんな、ステージの星の代表なんて、ますます務まらないよ。たくさん素敵な先輩や同級生や後輩が他にいるの、お姉ちゃんよくわかってるでしょ？」

「そうかもしれないね。でも、あの子たちには頼めない。新にしか頼めない。私は最初のステージで、表裏のコントラストが見たいんだ。そのためには、ステージを競う場にしないって最大前提がある。これは新にしかできないロールなんだよ」

「お姉ちゃん…」

「最初のステージ、『一緒に』踏み出してくれないかな」

少しの沈黙。

「お姉ちゃんとのステージ、夢だった。でもそれは、遠くのことだと思ってたの。だから心の準備ができてない。いつかはやってみせるって決めてたから逆に。でも…」

伏し目がちだった瞳がアリーシャの方を向く。

「お姉ちゃんを待ってる人にお姉ちゃんが応えるって決めたんだから、私も待ってくれてるアリサちゃんやお姉ちゃんのために頑張る！…いつかが今になっただけだとしたら、今できなきゃそのいつかだってできないもん！やるよ！」

「アラタ…！」

「え…アーヤもしかして泣いて…」

「な、泣いてなんかない！」

「アリサちゃん…」

必死で顔を隠すアリーシャを見て微笑む新。その身体をそっと背中から抱きしめるアンジェリカ。

「よく決心してくれたわ、ありがとう。…私だって地面から空を見上げた時期はあるし、今でももっと高い空を見てるの。ステージ、盛り上げましょう(あっ、歌でまだ上を目指してるのは、みんなには内緒よ?)」

後半耳打ちされた言葉に、小さな声で新が(はい)と答えた。

一方、自分がしようと思っていた事を先にされた吾華音がショックに打ちのめされている。

「新…今日はお姉ちゃんと一緒に寝よう、ね？外泊許可取ってあるから」

「…ええ～」

「アン姉さん、このどシスコン、そのままにしといてアラタ大丈夫？」

「ちょっと危ないかもだから、吾華音縛っとうるか…はは…」

程なく夕飯に呼ばれた4人は、ゆっくり食事を楽しんだ後、早速最初の作戦会議に入った。

新とアリーシャは翌日から、アルテミエフ家に1ヶ月間同室でホームステイする事となり、昼間は各々の普段通り、夜は打ち合わせとレッスンの日々となった。

そして10日程経ったある日。4人はライブハウス・プルミエ・ブランを再び訪れていた。オーナーである小野田からの希望で、アイカツシステムの更新に合わせた店内の様様替えにアドバイスを、というオファー。

新装開店は吾華音たちのライブより先になるものの、本格的なアイカツシステム導入のステージの皮切り公演になること、最新型のアイカツシステムのオペレーションであること、そして出演する4人の個性からより多目的な空間提案が期待できるということで、建築会社のスタッフと、アリーシャの提案で部材納入業者の立会いで、現状確認から作業が始まった。

「ステージまでの真ん中のとこの階段、いいですね！いろいろな事に使えそうです、それこそ先日仰ってた結婚式とか…」

「一手間かかるのですが、座席とテーブルに戻す事もできます。以前からのお客様のご要望がようやく叶えられますよ、建築会社の皆さんが頑張っておくれた…ありがたい事です。アイカツシステムを使えば、階段以外にも見せることができそうですし」

吾華音が感嘆の声を上げると、我が意を得たりとばかりに小野田が応えた。仮設置のアイカツシステム制御端末を吾華音が少し操作すると、デモ用にセットされていた映像で階段が滝に姿を変える。ごく自然に水音も響き、これで光合成した植物の放つ空気の香りがあれば、もはや現実と区別はつかないだろうという水準。

「おお、これは…」

「いやあ、凄いつすねコレ…」

建築会社のスタッフも唸っている。

光を当てる仕組みは、暗いところを明るくしてしまう(故にアイカツシステムのステージは基本明るい)。しかし、更新で設置された最新型は、暗い場所を暗いまま演出できるものだった。規模が大きいほど設置が困難なため、導入事例が少ない。吾華音がポケットからライトを取り出して滝を照らすと、きちんと照射したところだけが明度を追従している。

「いい買い物をされましたね。汎用性を狙うなら、現状まだ高額ですがこのシリーズはおすすめです。まだTV局でも持っているところ少ないですから、導入事例として開示があれば、番組制作系の会社からロケの依頼がかなりあると思います」

「私もそろそろ後進に店を預ける事を考え始めたのですが、任された者が当面困らないように、こうしてみました。ですが…いやこれは、召苗さんの演出観たさに当面隠居したくなくなりましたよ」

「それは…本当に光栄です、ここがあると、アピールしちゃいますね。…あまり忙しくてもお困りですか？」

「いえいえ、とりあえずシステムの導入費用は回収しなくては」

小野田が笑う。こういう話が包み隠さず出てくるということは、認めてもらえているという事だろう。吾華音も笑顔に。

まだファニチャーの類が設置されておらず、その陰に配置するための音源・光源・センサー類も当然まだだったが、複数の機材の同期を正しく取る必要があるアイカツシステムのうち、既設置のものの同期は素晴らしく正確で、その仕事ぶりに吾華音は舌を巻いた。聞けばティアラ代表が設営に立ち合ったとのこと。「そういえば…」と託されていたというメモを小野田が手渡してくれたが、そこにはたった一言こうあった。

「本気出してみた！」

思わずくっつと笑いを堪える吾華音、不思議に思って覗き込んだ小野田も同じ反応を。

「いやいやこれは。期待されていますな！」

「なかなか冷や汗ものです。わかってはいたんですが、今日来てる皆も」

吾華音がアイカツシステムをテストしている間、一番忙しそうに走り回

っていたのはアリーシャだった。レーザースケーラーは使う金属センサーは使う全天球カメラは棒につけて振り回す、果てはアナログの聴診器を当てて壁や床をゴムハンマーで叩くまでしている。

アンジェリカはホールのあちこちにマイクを置いて回っている。

最初手持ち無沙汰にしていた新は、アリーシャに微速風量系を渡されて、指示された場所の空気の流れを測っていた。今日はアリーシャの方がゴツめのノートPCを持ち込んでいる。かなり綿密なデータを取っているようだ。

アンジェリカは最後にステージの3方にマイクを置くと、オペレーションルームに向けて赤のライトを数回光らせた。チャイムの音の後、放送が響く。「工事の皆さんお疲れ様です。只今より音響テストを行いますので、10分程消音にご協力下さい」

程なくホールが静寂に包まれた。薄暗い照明の中、アンジェリカがヘッドフォンをかける姿。そこから直接声が響く。

My Heart Will Go Onの大サビの高音をいきなり。PA全切りの肉声で。伴奏なし。ビブラートを絶妙にかけた澄んだ声が響く。ファルセットも使わない素直な歌声。

ある程度歌ったところでまたライトをカチカチと。少しホールが明るくなると、店の関係者や作業員から割れんばかりの拍手。小さく微笑んだアンジェリカが、腕を曲げステージ流のお辞儀をすると、さらに拍手の音が高まった。普段着のアンジェリカはそのまま何の気なしに階段を降りてくる。

「床あたりはランダムな残響あるけど、テーブルと椅子入って人入ればそこまで気にしなくていいから。多分楽器も平気、基本設計から変わってない筈。ってどうかした？」

「いやあ。改めて、ブロードウェイ半端ないなあと…」

「いつもレッスンで聴いてるでしょう？もう、茶化さないの」

「だってほら…」

吾華音が示す方向で、小野田と建設会社スタッフが固まっている。

「ヤバイ。このまま塩になって崩れたら私捕まる？」

「ないない」

アンジェリカと吾華音が笑っていると、マイクを拾って来たアリーシャが作業用机の上に並べ始めた。ありがとうというアンジェリカの言葉に答えず、そこの建設会社の人PCの前に連れてきて、と一言告げて、ホールの端に歩いていく。途中、イヤホンをつけ、骨伝導マイクを喉に当てる姿。

「なんかアーヤ怒ってる？」

「ううん、あれは…」

吾華音には既視感のある姿だった。

「集中しきってる…結果出す時のアーヤだ」

これは遅れると悪かろうと、慌てて惚けていたスタッフを連れて来る吾華音。いいよ、とPCのマイクに告げると、アリーシャは足で数拍タイミングを取った後、壁に向かって走り出した。

アリーシャの身体がパルクールの動作で次々ホールのテーブル位置を縫うように通り抜けていく。ログデータと共に送られてくるアクションカムの映像に「ここは対荷重〇〇キロの固定で」「この壁が薄いので裏にフレームを」「この位置にホールドつけたいので鉄骨に溶接でアングルつけておいて」と次々音声の指示が付帯して飛んで来る。

最後にステージから階段下まで一発で飛ぶと、待っていた新に「行くよ！」と声かけ。軽く飛んだアリーシャの膝を新が跳ね上げる。そのままホール奥の壁を駆け上がり、天井の照明用フレームにぶら下がる。最後に「天井の真ん中につっ掛かりのハンドルお願いします、多分この上鉄骨あるので、一度天井空けて対荷重300キロに余裕持たせて」

呆気にとられたスタッフがワテンポ遅れて「は、はい！」と言うと、「以上、おしまい！」と言って、アリーシャはステージに向かって飛んだ。距離にして6〜7メートル、高低差3メートル程を、照明を揺らさずに舞い、綺麗に着地する。

「アラタイミングバッチリ！飛びやすかったヨ」

「アリサちゃん軽かった！びっくりしたよ！」

いつもの調子で戻ってきた2人を、またも硬直状態で迎える支配人と現場担当者。吾華音も流石に驚いて尋ねた。

「今のデータ取りだよね？本番あれ以上やるの？本気？」

「え？あんなの本番でやっちゃったらプロ名乗れないじゃん！少なくとも5倍は驚いてもらうからね！」

しれっと言い放ったアリーシャ、そのまま資材担当と打ち合わせに入る。内装の詰めに結構リクエストと助言をしたようで、結局1週間ほど後でアリーシャは新を伴って施工状況チェックに来ることになった。

一方で新が「私だけ準備らしい準備しなかったな」と言っているのを聞いた吾華音、ステージへの階段を昇るよう新に促す。

新が階段を一段上がる都度、ホールの景色が夜景へと変わっていく。ステージに着くあたりで、視野的にホールの天井よりずっと高い位置に花火が次々上がり始めた。仮想視界深度はアイカツシステムに古くから存

在するが、立体感の自然さで既存機と格段の差がある事を確認した吾華音、満足気に新に声をかける。

「新！衣装見てごらん！」

「えっ…わああ！素敵！」

作られた宵闇の中を歩く間に、新の衣装は浴衣に変わっていた。髪も髪留めで後ろにまとめられている(ように見える)。珍しくうなじが見える新の後ろ姿に、アンジェリカも「綺麗ね」と目を細めた。

「映画の撮影とかにも使える多目的システムだからね、フィッティングルーム使わなくてもお色直しできるんだ。これは本番でも使うよ」

「私も使っているの？」

「それはアン姉の演目次第」

そう言ってウインクする吾華音、ある事に気付く。

ホールで作業している男性全員が目が、花火を見上げる浴衣姿の新に注がれている。少し顔をひくつかせると、アイカツシステムをアイドルリング状態に戻した。

「えっ、もうおしまい？」

「続きはそのうち貸切でやろう、小野田さん、安くお借りできません？」

「本当に妹さんを大事にされていますな。空きの日が出たら優先的にお伝えしますよ」

「ありがとうございます、小野田さんはご覧になって構いませんので！」

「はっはっは、それは嬉しい。美しいものに興味がない人間は、この界限にはおりませんからね」

若干やり過ぎを照れる吾華音であった。

そして時間はあっという間に流れ、いよいよ本番の1週間前。